
‡ PENGIN ~ ペンギン ~ ‡

Taka-To-Diggy

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

≠PENGINGペンギン≠

【Nコード】

N7934G

【作者名】

Taka-To-Diggly

【あらすじ】

喧嘩喧嘩の毎日进行していた高校2年生の桂健二。抜け出そうにも抜け出せない呆れた生活。そんな健二の前に転校生が現れる。その転校生と絡んでいく内に次第に厚生していく健二。そして昔からの唯一の特技である水泳をまた始めようとする。一人の高校生が送る青春の1ページがここに！

第1話「転校生」

歓声も何も聞こえなくなつた。聞こえるのは水の音だけ。そして俺はピストルの音と共に飛び込んだ。

「ペンギンって陸じゃあボーっとして何もしてないように見えても海に入ったらすごい速く泳ぐんだよ。健ちゃんってペンギンみたいだね」

「ほな行つて来るわ」

俺はそう言つて家を出た。

春の日差しは暖かく、風はまだ冷たい。通りの桜の花びらがチラ舞っている。登校中の小学生が騒ぎながら登校している。真新しい学ランを着こなし歩いている中学生。春は何もかも新鮮である。

俺は無事進級することができ高校2年生になることができた。昔から勉強もあまりできず、学校もサボり気味だった俺は進級を危ぶまれていたが、追試も見事やりこなし進級することができた。追試の合格を聞きに言つたとき先生が

「お前はやればできるんだから来年はちゃんとやれよ」

その言葉が頭に残つてた。やればできるとかただの決まり文句だ。

やつてもできない事はたくさんあるし、俺は多分できないことの方が多い。おそらく先生のその言葉は、「来年はこんな面倒かけさせるなよ」という意味が少しながらも入っていたのだと思う。大人とはそんなものだ。

「おはよーさん健二」

俺が歩いていると後ろから声が聞こえた。俺より20センチほど高い位置から見下ろすこの男は橘惣介だ。俺は惣介と呼んでいる。タチがチフスケ

「何回も言っが俺を見下ろすなあほ」

俺は身長が小さい。高校生にして165しかない俺はちょっと身長をコンプレックスにしている。165という数字はそんなチビというわけでもないのだが、何分見下ろされるのは好きじゃない。

「お前が小さいんが悪いんやろーが」

「うるせえ」

そう言って惣介は俺の頭をポンポンと叩いた。俺はその手を振り解きあいつのスネを蹴ってやった。

「い、いてッ！」

惣介はは道にうずくまった。自業自得だ。

「そ、それより健二、お前もいい加減部活は入れよ。ほらバスケットもええからさ、俺が先輩に言っというてやるし」

惣介はバスケ部だ。中学からずっとやっていて、その身長もあつてか1年からずっとレギュラーだ。

「お前は俺を馬鹿にしてるんか？チビがバスケやってどないすんねん」

運動神経もとびつきりいわけじゃない俺がバスケなんてやってもうまいこといくはずがない。

「ほな水泳部でもええしさ。お前泳ぐの得意やったやんけ。部活もせんとブラブラしとったら碌ろくな事ないぞ？その顔の傷、また喧嘩したんやろ？」

「ちやうわあほ。昨日階段でこけただけや」

惣介は呆れたような顔をして、

「そんなことばかりやとつたら美穂が悲しむぞ」

そう言い歩き出した。

「お、お前そのことはッ！」

「あ、悪かったな。お前の前では禁句だったか？」

そう言い放ち惣介は歩いて言った。

この顔の傷はこけたんじゃない。惣介の言った通り喧嘩でついた傷だ。昨日隣の高校のやつらに呼び出された喧嘩した時のものだ。俺も何度もちやんとしたことをやろうと思ったことはある。でも抜

け出せないのが事実だ。俺が大人しくしていても喧嘩は吹っかけられるし、周りの目は変わらない。俺の頑張りが足りないんだって思うこともある。けど俺もそこまで強い人間じゃない。気がつけば喧嘩喧嘩の毎日だ。こんな生活、絶対いいはずじゃない。それは俺の心の中だけのモノで行動には現れない。

「よし今日も全員出席やな。お前らももう2年生。中弛みがあるかもしれんが、来年は受験や。高校生うちゅう自覚を持って行動するように」

正に俺へのあてつけのような言葉だ。行動に現れないといったが、俺はひとつ決意したことがあった。毎日休まず学校へ行く。それはちゃんとやろうと思った。まあ当たり前のことなのだが。

「今日は皆に新しい仲間を紹介する」

教室がざわついた。転校生が来るらしい。

「入ってきなさい」

入ってきたのは女だった。肩まである黒髪を靡^{なび}かせながら入ってきた。そして教卓の前に行き自己紹介を始めた。

「神田川 香織です。父の仕事の都合で転校することになり、この学校へ来ました。東京から来たのですが、小さい頃はこの近くに住んでいたらしいのですが全く覚えてなくて。なので皆さんいろいろ教えていただけるとうれしいです。よろしく願いしますね」

そう言って満面の笑顔でニコリと笑った。

盛大な拍手が送られた。その大半が男子の拍手だ。それもそのはずだ。かなりのレベルの高い可愛さだ。東京ってのは普通にこんな可愛い子がいるもんなんだなと俺は感心した。

「それでは神田川はそうだな……。桂の横に座ってくれ」

そう言って転校生は俺の横の来た。

「健二の横なんか座ったら喰われてまうで」

誰かがヤジを飛ばした。

「あほか、初対面の女喰ったりするか」

「初対面じゃなきゃ喰うのか？」

先生がツツコミをいれた。みんなは笑い出した。

「よろしくね、桂君」

転校生はニコつと笑って俺の横に座った。

「健二でええわ。みんな健二って呼ぶしお前だけにだけ桂とか呼ばれたらきしょく悪いわ」

「じゃあ私も香織でいいよ、健二君」

いちいちニコニコするやつだ。俺はちょっと恥ずかしくなって窓の

外を見た。

「可愛い女の子がとなりに来て照れとるんか桂？」

そう先生が言ってきたのを俺は無視して外を眺め続けた。

第2話「約束」

毎日学校へ来て、1から6時間目までちゃんと受けるというのがこんなにだりいことなんて久しぶりに感じた。学校へ来てても屋上でずっと寝ていた俺にとっては50分の授業というのは辛いものになっていた。もうすでに俺の決意は敗れようとしていた。

俺は帰りにいつも寄る公園へ向かっていた。家の近くの公園だ。人も少なくゆつくりするにはいいところだ。人が少なくいと安心してタバコを吸えるからだ。

それにしても転校生はすごい人気だった。東京から来たつてのもあるんだろが、何よりその可愛さで他のクラスの男子や先輩がわんさか来ていた。俺はそのせいで大変だった。

「神田川、何かわからん事があつたら桂に聞いてええからな」

そう先生が言つたらしい。転校したての神田川は学校に何があるとかわからない。

「神田川さん、僕が学校案内してあげるで」

「いや、俺が案内する！」

取り合いだ。

別に誰が案内したつて一緒だろう。しかもそれを俺の横の席でしやる。せつかくの昼休みが台無しになる。

「みんなありがとう。でも先生からわからなかったら健二君に聞くようにって言われてるから」

男子共の視線が俺に集中した。

「あ、あほ。んなだるいことするか。こんなに案内したがっとなるやつおるんやからそいつらに頼めや」

「え、でも私…」

神田川は何か言い足たそうだったが、すぐにまた男子の取り合いが始まった。結局みんなで行くことになったらしい。十数人がゾロゾロと学校案内。ご苦労なこった。

「行つてやればよかったのに」

惣介だ。

「あほか、あそこで俺が行ってみろ。男子の袋たたきやつちゅうねん」

「ということはホントは行きたかったんか？」

ほんとこいつは苦手だ。

「んわけあるか」

俺はそう言つて売店へジュースを買いに行った。

俺はタバコに火をつけた。この公園の滑り台でタバコを吸うのが一番好きだ。この滑り台は俺にとってはちょっと思い出のある滑り台だ。ガキのころ俺はここで当時好きだった女の子に告白した。

「俺がおつきになったらお前をお嫁さんに貰ったげるからな」

ガキの頃の約束だ。相手も俺もずっと忘れていたが、ある時思い出した。けどその記憶も曖昧で、当時俺は二人の女の子と仲がよかつたらしく、毎日ここで三人で遊んでいたらしい。つまり俺はどっちの女の子にいったのか全く思い出せない。ただ俺はそれを思い出したくてこの公園に通っている。まあ思い出したところで、それは叶わない約束なのだが。

俺の幼馴染に美穂という女がいた。家が近所で、昔遊んでた三人の一人だ。昔から兄妹のように遊んでいた。けどその美穂が中2のとき交通事故で死んだ。俺には何が起きたのかよくわからなかったが、もう美穂と一生会えないんだってことはわかっていた。そんな時だ。俺は約束の事を思い出したのだ。俺は美穂に約束していたのかもしれない。そう思うと急に悲しくなって、俺はずっと泣いていた。守ることのできない約束を思い出してしまったのだ。

もう一人の子はガキだった時に引越してしまった。それっきり連絡もなにもしてない。ただ、もう帰ってこないかもしれないって母さんに言われたのを覚えているだけだ。

どっちに約束していたとしても、もうそれは過去の約束だ。俺ももう忘れようとしている思い出だ。

「健…二君？」

滑り台から下を見ると、そこには犬を連れた神田川がいた。

「なんやお前は転校生やんけ」

「ちよつと。転校生じゃなくて神田川 香織」

神田川はぶくつと膨れた。

「すまんすまん、神田川やな」

「か・お・りでいいって言ったでしょ。健二君が、『俺のこと健二って呼んでくれなきしょくわるいわー』って言ったんだよ？私も香織でいいよ」

なんか神田川のモノマネが妙に腹が立った。

「それより、高校生が喫煙とかダメじゃない。タバコは二十歳になつてからだよ」

神田川は俺の手のタバコを見て言った。

「ええやんけ、お前には関係ないやろ」

「関係なくない！」

意味がわからない。今日転校してきて、今日出会って、たまたま俺の席の横になっただけだ。

「関係ないやろ。今日出会ったやつになんでそこまで言われなあかんねん」

「それは…。でもダメなことをダメって言って何が悪いの！」

俺はいつもこうだ。別に神田川は間違った事を言ってるわけじゃない。でも俺は…。

「なんやねんお前。人がせつかく気持ちよう休んどったのに。もうええわ」

俺は滑り台を滑り降りて帰った。その時の神田川の顔は悲しそうな顔をしていた。ちよつと言い過ぎたか…、そう思ったが俺は声もかけずに帰った。

第3話「水泳」

俺は朝から鬱だった。転校生と初日から気まづくなってしまったからだ。昨日は言い過ぎたかもしれない。それに神田川は間違った事を言っているわけでもない。俺は登校しながらがつくりしてた。

2年生になって3週間が過ぎた。順調に毎日学校に通っている俺は、自分から見ても素晴らしいと思う。当たり前のことを当たり前にするというのは、昔の俺にはなかった言葉だ。なんでもめんどくさがり、1日中ボーッとしている俺は、いわば怠け者であった。「めんどくせえ」が口癖で、ほんとやる気のない人間だった。そんな俺も今じゃ毎日学校行つて授業受けているんだから、人間変わろうと思えば変われるのだ。

教室のドアを開けると神田川が男子に囲まれて座っていた。神田川はこちらをチラッとみたがすぐに男子との会話に戻った。やはり昨日の事を怒っているのだろうか。俺は何事もなかったように自分の席に座った。そして窓の外を眺めた。青い空に白い雲が漂っている。雲は自由でいい。流れに逆らわず、身を預けて浮いている。それを誰にも邪魔されることなく。

「健二君」

神田川が俺を呼んだ。俺は振り向き神田川の顔を見た。別に怒っているのではなさそうだ。

「健二君って何部に入ってるの？」

「なんも入つとらへん」

そう言うと神田川はクスツと笑い、

「めんどくさいから？」

と言った。なんでこいつが俺の口癖を知っているのか気になったが、大方クラスの野郎が言ったんだらうと納得した。

「運動得意やないし、何よりめんどくさいからな」

「でも健二君、泳ぐの得意なんでしょ？橘君から聞いたよ」

俺はそれを聞いた瞬間惣介を見た。惣介は何事もないように授業の予習をしている。

「水泳部に入ったらいいのに…。私も中学では水泳部だったから水泳部に入ろうかなって思ってるの」

神田川が水泳部に入ろうが俺には関係ない。

「どーぞご勝手に」

俺はそう言っただけでまた窓の方を向いた。神田川は不満そうな顔をして前を向いた。ちょうど先生が入ってきたのだ。また長い長い6時間が始まる。

昼休みになり俺は惣介と二人で売店に飯を買いに行っていた。

「お前いらんこといろいろ言つなや」

俺は朝の事を惣介に正した。

「お前が泳ぐん得意やつちゅうことか？ええやんけ。神田川がお前の事聞いてきたから答えただけや」

「いらんこと言わんでええねん。あいつなんかメンドクサイ奴やしやめてくれ」

「誰がメンドクサイ奴だつて？」

神田川が割り込んできた。

「あ、いや別に…」

「こいつがお前のことメンドクサイ女やってさ」

ホント惣介はイチイチ俺に嫌味な事してくる。

「ひつどーい！私そんな風に見られてたんだ健二君に！」

そう言つて神田川は俺を殴つて来た。ホントめんどくさい。

「あ！健二先輩！」

誰かが俺の名前を呼んだ。振り返るとそこには1年生がいた。赤みがかったサラサラヘアの靡^{なび}かせ満面の笑みでこっちを見ている。

「先輩この学校だったんですね！！うあーなんか嬉しいなあ。先輩

に会えるなんて!」

こいつは小学校の時の後輩の長瀬 誠だ。一つ下で俺の事を慕ってくれている。

「誠もこの学校やったんやな。お前の噂は聞いてるで。優勝おめでとうな」

誠は去年全中100M自由形で優勝したらしい。

「ありがとうございます!あ、そうだ先輩。昨日水泳部の見学行っただけ先輩いませんでしたけどどうしたんですか?それに中学の時も全然先輩の名前聞かなかったですし…」

俺は黙り込んだ。すると惣介が、

「こいつは水泳部には入ってないねん。悪いな、俺ら飯食いに行きましたな」

そう言っただけ俺の肩をもちその場を立ち去った。

「なんでツスカ先輩!なんで水泳部入ってないんですか!」

俺と惣介は誠の言葉に振り返ることもせずその場を去った。

「あ、多分健二君にもいろいろあるんじゃないかな?ほら、怪我とかさ」

「先輩が水泳辞めてるなんて…」

「悪いな惣介…」

俺はサンドイッチを食べながら謝った。

「別に気にするな。それより、お前本気でもう水泳はせん気なんかな？」

「…」

俺は黙り込んだ。

「無理にとはいわん。せやけどお前ほどのやつが、怪我とか以外の理由で辞めるんは勿体無いって思うだけなんや」

「…」

「一生、陸におるつもりか？」

俺は惣介の言葉に何も言い返せなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7934g/>

‡ PENGIN ~ ペンギン ~ ‡

2010年10月9日06時18分発行